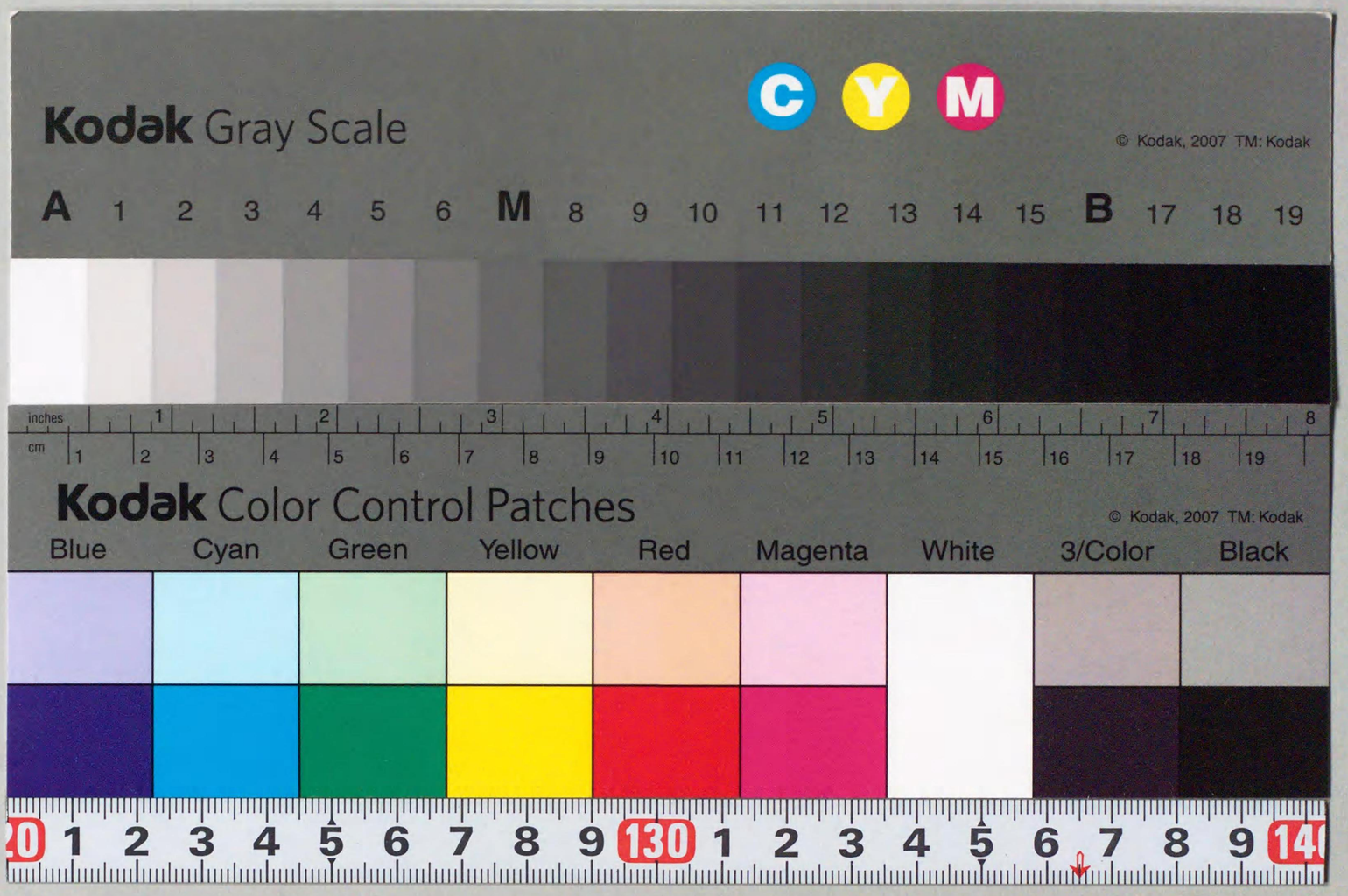


W162-J1
12010008422864

乾

更紗畫譜附言

一 天明四年甲辰江戸に於て華布便覧を梓行せし其書をつゞめ蓬萊山人なるもの著せしを文演美孫なる者つとめしが増補せるもの奉邦近世盛ん更紗を賞ずるやうになりぬ。其序よろしからず人かゝるぞ。但其描法乃ち傳なるものゝ有よし洗へばよくなるぞ。絵もぬるまでも陰翳教て漸く彩流るゝのごとなるべし。絵拙なるも意つゝしみて描きたる事甚ぐ精しくなるを祝して四方更紗をぬむ人船貢を待ぞ。高價を費ざるべし。奇

W162
J1
I種
W
1201000842286

品を綴る技人事二ありの賜ものあらざらんや
余向ふ裝劒奇賞若干巻を著し。巻末唐革の
圖を彙ふ其後更紗乃圖を。を後の附せん事
を志を。ふたゝび便覧の書。物ふたゝびして其事終止。
今茲はふたゝびふたゝび校を求ひふたゝびを志す発
せり。ふたゝびも裝劒奇賞のこと数千部刷行し
て。諸君乃雲顧を辱ふたゝびまでぞ。此圖譜を附せん
事をくハ。向ふ求ひふたゝび而。時一冊のごとくふたゝび
恐まて。別ふ更紗圖傳と改題して。新ふ工ふ命ぞ
は校関東より上ふる時ふたゝびの塵てや。取ふたゝび損じなく

即ふたゝびを修治をべくふたゝび。新ふ梓ふたゝびを事。二ありの
書を離ふて。余が作のごとくふたゝびせんとふたゝびはあらざ。奉の
裝釘ふたゝびをべて。裝劒奇賞の夢と同揆ならん事を欲
してなり。是余ぞ嘗て志を所なまで幸ふ事をぞ
ぬとてみなれ
余素更紗をぬどふたゝびを描ことあるハぞ。素業ふ一
端ふたゝびを取扱ふ事。此数十年ぞ間。奇品を見ふ
事。ふたゝびふたゝび。嘗て此圖をあつめんと志てよう。奇
品をふたゝびぶ必ず求めふたゝびぞ。ふたゝびふたゝびを残ふたゝびて。ふたゝびふたゝびの
蔵を。今便覧ふ圖をふたゝびの。狂奇品ぬなふたゝびあらざれバ。

いさゝか前板の闕を増補し、もつて校正を精くし、且其描法を採摭し傳を、全く前板の意に随ひ、或ハ重出の言のいでゝ、二ゝの功を奪ふべからざるを刪潤して、

一 前板唐土朝鮮及諸蛮の名称挙て其産地を考へざるは、尤功者の闕典なり。凡更紗ハ多く蛮舶の貢もの、あまねく各其出所を詳にせん事ハ、固より不可なれども古渡のめき〳〵今ハ〳〵の多きに至ては、其産地を推尋の事ありて、書ざるべからざるなり。故今是を悉くこれを刪去

一 前板及此書、更紗の名目をもつて、何なに伝の紗なゞと、高貴の呼ぶ称をもつて、或ハ関東と上方にて呼ぶ正名あらんや。彼非にして此是なりといふべからず

一 ちさとらみや、通用ハ華布と書、又俗間ハ更紗と書。此書ハ本邦上古の遺風なり。今ハ唐風を尚んでこれを用ゐるべからず。只俗称を正名とあらんぐ。尤二ゝの雅称あれども、更紗ハ假字にて、假字ハ本蛮語にて正字なし。

をもつてめんぐるものなり

天明五年乙巳六月

芝翠三人稲葉通龍識

更紗圖譜目録

一 更紗(サラサ)を描下地(カキタテ)拵様(コシラエヤウ)の事
一 更紗描法(サシヤウ)心得(コヽロエ)の事
一 更紗好(コノ)み描上(カキアゲ)る法の事
一 古色付(フルビ)様(ソメヤウ)の事
一 生煎脂(キニエンジ)ときやうの事
一 藍蠟(アヰラフ)ときやうの事
一 雌黄(シワウ)ときやうの事
一 草汁(クサシル)合せやうの事
一 紫合(ムラサキ)せやうの事

一 茶色(チヤイロ)うらへやうの事

一 紺(コン)うらへやうの事

一 黒(クロ)合せやうの事

一 絞(シボ)り留(メ)様(ヤウ)の事

インチニ付事

白(シロ)く染(ソメ)ぬきやうの事

霜(シモ)ふり更紗仕様(シヤウ)の事

仕上(シア)げ洗ひやう乃事

金(キン)更紗銀(ギン)ざし仕様の事

浪華　稲葉通龍　著　右衛門補正

更紗(サラサ)を描(カク)下地(シタヂ)うらへやうに付事

描(カキ)更紗(サラサ)下地ハ西洋(セイヨウ)布(キン)ふべし。但(ダシ)し曲尺(カネジヤク)弐尺(ニシヤク)幅(ハバ)四尺四寸(シスン)ほど弐(ニ)反(タン)一尺(イツシヤク)一幅(ヒトハバ)といよ。是(コレ)を黄豆(キナコ)の汁(シル)をもつて漬(ツケ)て。夏(ナツ)ハ一夜(ヒトヨ)冬(フユ)ハ一日(ヒトヒ)一夜(ヒトヨ)許(ホド)つけおき。擦(スリ)鉢(バチ)をよくするように。水(ミヅ)二合許(ホド)入(イレ)き。木綿(モメン)糸(イト)にて絡(カラ)げ。其(ソノ)滓(カス)の堅(カタ)くなるほどよくもぶりくる。其(ソノ)汁(シル)をこして西洋布(カナキン)の表(オモテ)より一遍(イツペン)ひき。乾(カハカ)して裏(ウラ)より二遍(ニヘン)引(ヒキ)き。各(オノオノ)乾(カハカ)して地合(チアヒ)を試(コヽロミ)るハ指(ユビ)よあを付て。をもてより一滴(イツテキ)西洋布(カナキン)ハ表(オモテ)よおとし見(ミ)る

之露乃玉地なり。地へ志ことも。みその
まゝ紙ハごれをこうざるなり。そ
後ち西洋布地猪牙にて表ようよく擦て描之。又一法
之更紗を描んとおもふ地へ。極上真の生洲地。ランビキにて
取りたる其露地を描んとおもふ地へ刷毛にてよく引ときそ
を漆塗れ板之仮張して。二三度も引べし。尤度毎ごとに
乾して引なり。ランビキハ。花にても。葉にても。露地取の
臭なり。銅にて製して雑貨舗にて。今生洲地あを取
之ハランビキ中へ入るなどの。臭へ生洲を入て蒸ハ。を露外へ
志ばらく流ること。ランビキなき時を。大き目にするなり

茶碗二を以て。一之生洲を。一を覆て。を蓋として。又火
之かけて。こと志ハ煮ざれバ。其湯気上之ゝ
それを。とりて。別の器之取べし。
右之取之露を引之ハ其描んとおもふ日。快晴の天気を見
定て早朝より引べし。

更紗描法之傳の事

凡更紗地描地合ハ。極上の西洋布地用ゆべし。
尤紬之描事もあれど。紬ハ絖裏之光彩なくて賀ぬなり
即之ちゝ凡更紗地裏ハ。除慶之ごとくおくべし。之故ハあと
ようこゝらへ。絵具ハ。黄色取合ぬるのなれでなり。其

描んとおもふ摸様を細く下絵を附ゞ下画そくと相て後各其光彩を着ゞ地色まで上繪を描くよハそ下をうそく彩を施しおく。よく乾して其上を濃絵具まて描ゞ。所謂人形ハ。唐法ハとぐて同し事なり。或ハ生臙脂もそゞ黒ろかうらをはやうなる系ハおてゝ夢を合して書事あり。淡ハ薄そよ生臙脂を合して加減ほゝくく久合て用ひ。黄ハ黄を帯そよハ蜂黄丸ゟ一生臙脂をゞゝゝゝなり。一應更紗を描筆ゟひハ画家の筆意ゝハ異なりて筆當なく。

いらゞ不器用なぬりくそ筆ゟひ。

三紗線描ハ傳なり。後ゞ白く深脱んとおもふ一ハ散散の事ゟて細くゝも太くゝも。線描ゟよく乾して後一面ゟ絵具ゟて白く摸様ハおゝなり。阿蘭陀人の傳ゟ。ランビキゟく取し生臙の雫て地を引ハ勿論ゞの絵具ゟくうも筆を洗ふゟも右の生臙の雫をゟうといつまでゟ。たゞまでゟ及ぶゞらずゞ深くゝ地ゟくよく引そめゝ決して脱ゝといふ事ハなし

更紗を早く描上るほうの事

板の上へ展て小刀にて裏より静にこそげ去べし或は地切など出来しごくよき彼をも一所にあつめ裏より古き切を残らず布て丁寧に補へばいかなる古渡とも見ゆるなり

生臙脂 しやうえんじ

極上の生臙脂大こころまうたにうすく水をたらつぷりと入こまぼろく漬置てよくふやけたるを忌なきつばを箸などにて絞るべし。さて生臙脂の一絞りを汁を火にかけそろくと煮てよくとけたるを上水をそつと取そつと下へ残りたるは生臙脂をそつと四へ入まぜ時々火にあてて干付なり。但し塊の入るを嫌ふべし。

更紗圖譜

を上へそろりと布を展ひて干乾すべし。又冬月或は天気陰なるときは水に漬まつたくアク乃抜るまで漬置て乾すべし。

藍蝋 あゐらう

随分上品とつた藍蝋まつたくアク乃抜るものなり。大抵夏は三日冬は五日浄清き水に漬置てさて水をかへて干ほけそ。水ぬきよくなるようにして干ほけそ。水ぬきよくなるようにして干ほけそ。

貯へ置き用ふる時臨て少しづゝ四に取出してお膠を和してきとなり。筆の毛ハ白てほを水にあらひさらしたるを用ふべし。新渡の更紗より空青のごとく花くしきを筆の毛のうへへ紅夷のヘルレインスブラアウといふものにて描ハ

汁を色出すといふ。おうれんぐさ 菠 蘿 をよくアクをとりて出すなり

雌黄

雌黄用ひ採れ事

雌黄をとるには其品を擇ぶを第一とす。麁品は其色のあしきをいふなり。極上ごく透徹やうなる紙捻と用ふべし。とき採おほし。土砂交りて用ひがたし。瑯玕の更紗とたとふるはおし。生藙腸を加へ用ふべし。畫家も雌黄は多く合せ彩色の具となすなり

草の汁合せやう採れ事

雌黄よくとりて。菠 蘿 を加まぜ萌黄色となるを待まち汁とるなり。葱の多きをよし。又内へ少し炭のゼウをかまぜ交ぜ彩あり。又古漬なども。その汁よし。又雲母加へ或は生藙腸を加へ煮詰てよし。

紫合せ採れ事

むらさきは藍 蘿 と生藙腸を合せ。尤蔥の多をよし。ぶどう濃くして淡くなれば洗て後色やうくよし。蔥のなるものなり。又蔥おく赤のうち紫もあり。二色とも各々蔥をゆで彩を互に施すべきなり

茶色(チャイロ)　樫(カシ)の木(キ)の皮(カハ)を煎(セン)じて染(ソメ)る

よく茶(チャ)を煎(セン)じて冷(サマ)して置(オキ)て別(ベツ)の器(サラ)へ取(トリ)出(ダシ)し或(アルイ)は水(ミヅ)にて和(アハ)して染(ソメ)るなり

を忌(イム)なり明礬(ミヤウバン)凡(オヨソ)の水加減(カゲン)にてもよしなり但し明礬(ミヤウバン)

ほうがよし明礬(ミヤウバン)を除(ノゾ)くときは薄(ウス)く染(ソ)まるものなり

下(シタ)を濃(コキ)く染(ソ)めるときは明礬(ミヤウバン)を除(ノゾ)くべからず

紺(コン)　藍(アヰ)にて染(ソ)むるなり

なり　藍(アヰ)にて染(ソ)むるときは明礬(ミヤウバン)を除(ノゾ)くべからざるなり

黒(クロ)　合せ染(ソメ)の事

挽榔子(ビンラウジ)　壹匁　五倍子(フシ)　四匁

五分　六分　五分

ぐつと煮(ニ)詰(ツメ)て置(オキ)其(ソノ)染(ソメ)汁(シル)と其(ソノ)染(ソメ)汁(シル)と

後(アト)ぜんど汁(シル)を二遍(ヘン)かくること即(スナハチ)ぬ黒色(クロイロ)となる

干上(ヒアガリ)て後(アト)鉄漿汁(ハグロノカセ)を一遍(ペン)かくこと

但(タヾシ)鉄漿汁(ハグロノカセ)は

黒(クロ)ミを及(オヨ)ぼさぬ方(ホウ)へ

を模様(モヤウ)の裏表(ウラオモテ)より丁寧(テイネイ)に

ぬり干上(ヒアガリ)て後(アト)地(ジ)を染(ソ)ざるなり

黒(クロ)ミ　生薑(ハジカミ)の上(ウヘ)にて茶(チャ)を煎(セン)じ二三遍(ベン)梅水(ウメミヅ)を

まして能(ヨク)染(ソ)べし梅(ウメ)の酸(サン)が

へ出(ダ)ぬうちに染(ソ)めること

を合(アハ)せ染(ソメ)るときは生薑(ハジカミ)

染(ソ)むるときは染(ソメ)あがりの色(イロ)悪(アシ)なるべし

なり。但し一かやうな地を染るには先下絵丈ケ仕て、それより糊を置、希こまるをごく染て水洗して干上黄至のごを調て、それ〳〵の絵具地染施し、上をこゝろあて、水洗ひこゝろもよし。又古渡の黒地に光澤あるもなきの二品あり。其八黒地光澤出る為、墨を差へぬまゝ下地染て、よく上る墨地や黒八光澤なし。墨を度〳〵差注ぬと悪し。

絵具留揉の事

梅むきこま水をこくようめ、一多く入て、半時許置く。なるべく味の酸き時、刷毛に付てよく振て、刷毛に水ゆき引、乾てほ刷毛になるほどと水をこゝろ八、絵具付ざるもの也。

インチン

古渡レヤボンニ多く細こ作ぶし。水一升入て、暫おけバ解し。上乃水計こりて、レヤボン半斤程壹匁程上の温飩粉五匁程合して、ねばりの出るほどかきまぜ、用ゆべし。凡諸色八をゝよう、まかの事ニ用ふるも、寒ハ水をこゝろ、暖月ハ温ふ湯を水を汲てこゝろを湯こ溶し、氷を入れバよし。久しきを残置

付ケ引ごし。色八こゝろと水をこゝろ八絵具水こりて散ゞ有なり。墨ハ此事ハ、時こ臨て描人の考へある。

インチンの事

古渡レヤボンニ多く細こ作ぶし。水一升入て、暫おけバ解し。上乃水計こりて、レヤボン半斤程壹匁程上の温飩粉五匁程合して、ねばりの出るほどかきまぜ、用ゆべし。凡諸色八をゝよう、まかの事ニ用ふるも、寒ハ水をこゝろ、暖月ハ温ふ湯を水を汲てこゝろを湯こ溶し、氷を入れバよし。久しきを残置

ども摸ぜざる事

白く深ぬきやうに溌脱んとおもふ時ハ蕎麦の散粉ハ蕎麦を舂て細末にしたるを用ゆ。明礬の極細末とを二味等分に合し。水を和ものゝなれバ考てよく倆べし一方よりハ二味を合ん。水勝を合し用ふるとも有。ホカ可なり。但し此二味を合せるときハ。ソバ粉ハ少なくして。明礬ハ多くせざれバ。クワカ画ず。所謂面描をもちゐざるときハ。フデサキ筆尖よりかくまりつゐて下へたらさゞるごとくなり。

脱ざるときハ。カンタウ寒中なるゆゑ湯ヒヤ冷ならバ。ゴマ胡麻の油を湯煎にして。ホソ細筆にて。カキ描ゆくべし。凡湯煎ハ。ヒヤウビガヘ金よりて湯をモシ若ハ。ミヤウバン明礬ハ。スミ墨ハ。カラハナ唐花

ちバ・糠散ていどあるべし・そ
く・ぼつ 刷毛とゝのまて 篩の肉汁拭なり・但し篩と地
との間を・二三すもるく擧て拭なり・ぼつて吹てハ片吹して
又苦しくそのなり・此事扱ふまでも不・宜て良法な
らべくれども・今ハ一書ニ記ス

穏なるべし・黒くハこゝまで終 描末し 後ハ筆毛熟く考
へてこれを洞し 後ひて 書を畢とする事なるべし

仕上洗ひやうの事

已ニ描畢て後・犯一面ニも傷ゝ置て・傷ハ
描おくし なごあらんと・再三吟味して洗べし・是洗

ひ後ハ絵具補ひかゝるべきなり・若ニ 個ひろ更紗と・平
なる板ニの也・生澁を煮ふく二三度と煮まして・模様乃上へ引・
裏へ両度を度とゝは干て後・盤ニ水を入洗ふべし・光彩を出
し・生澁を煮ふくと・又時ぶつと絞ニ塗板へ表の方ニ下ニ
張付て干べし・ゝまゝふ後幾度洗ふて煮ふとゝいふなり

金更紗銀更紗仕揉の事

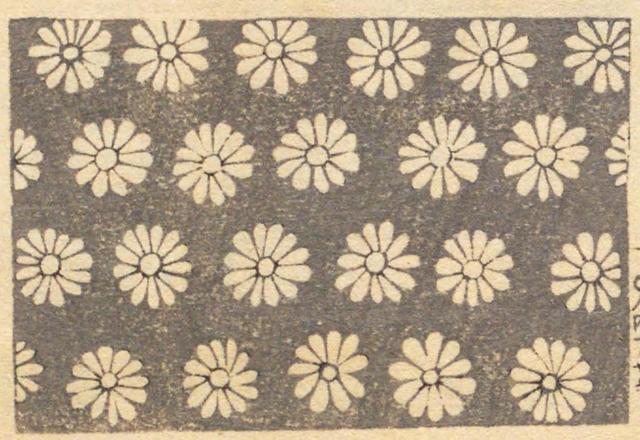
已ニ 描畢て後・手ニ金彩を施んと・先石を・朱のキメ
て未のキメと稀して貰し を膠ニ・ゝまして・ゝさ・初ハ薄くして一遍目の上ニ描
二遍目ハ濃して描・乾して後・金泥を膠まして・ゝさ・金泥
ニ膠を合ニ事加減ゝのし・功者の人ニハ先ぶべし・又絵具ニまして
貰ゝのふくハ先ぶべし・そハ手ぶくして澁ふる故ふしまず先功者の人ニ聞 朱の

キメて描(カク)ようをかくべし。又法(ホウ)よろし。已(スデ)に模様を描きたる板へ。又紗の表(オモテ)を下(クダ)して張(ハリ)。裏(ウラ)ようをもさせ。葛粉(クズノコ)を水に解(トカ)し。よく干(ホ)し。よく乾(カハキ)たる時。絵具(エノグ)を置(オカ)んと思ふ面を。胡粉(ゴフン)水干(スイヒ)のメン胡粉(ウス)ニカハを薄(ウス)ニカハ膠(ニカハ)よろしきを上品を用ゐ。水膠(ニカハ)にてときたるを。よく描(カキ)乾(カハ)かし。うごかぬやうにして。金箔(キンパク)を夫(ソレ)の模様(サウヨウ)に切(キリオキ)置てそれを押(オス)なり。是(コレ)にて下絵(シタエ)なども。うまく残(ノコ)らずして本紙(ホンシ)なども。うまく描(カキ)て。梓(アツラ)へのごとく。金箔(キンパク)など。能(ヨク)附(ツク)なり。彩色(サイシキ)の法(ホウ)は。金箔(キンパク)紗(シヤ)も同(オナジ)法なり。又銀泥(ギンデイ)紗も同法なり。但(タヾ)し岩絵具(イハエノグ)は。正平墨(シヤウヘイズミ)紺屋墨(コンヤズミ)などを。膠(ニカハ)にて能(ヨク)すりて描(カク)なり。

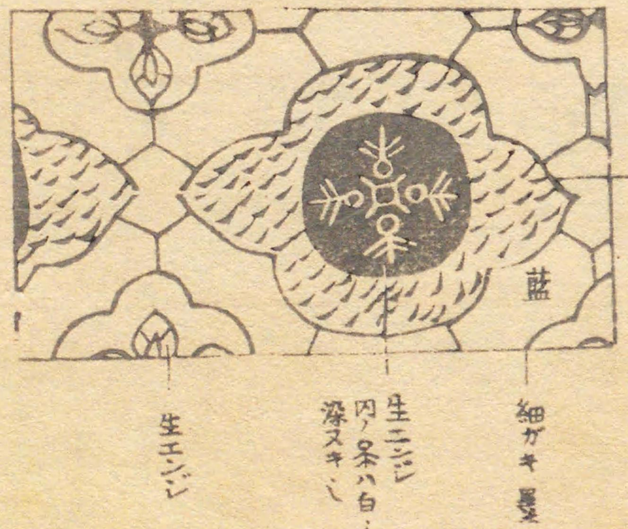
又(マタ)号(ナヅ)けの摸擦(ウツシ)のようを。描(カキ)仕(シ)舞(マヒ)て。一遍(イツペン)水(ミヅ)にて拭(ヌグ)ひ。裏(ウラ)へ返(カヘ)して乾(カハキ)時。銀泥(ギンデイ)を薄膠(ウスニカハ)にて。一遍(イツペン)ぬり。乾(カハ)かしてよし。金泥(キンデイ)ならば。正平墨(シヤウヘイズミ)にて描(カク)ようをかくなり。尤(モツトモ)金泥(キンデイ)ほどは。ぬるに及(オヨ)ばず。今一遍(イツペン)紙(カミ)の上(ウヘ)へ。摸擦(ウツシ)を出(ダ)さんと思(オモ)ふ。紙(カミ)を板(イタ)の上へ展(ノベ)。猪牙(イノキ)にてよくしごきて。よく乾(カハ)かし。裏(ウラ)へ返(カヘ)して。摸擦(ウツシ)の事(コト)。薄(ウス)ニカハを押(オス)ごとく。勿論(モチロン)金紗(キンシヤ)も。正平墨(シヤウヘイズミ)にて描(カク)等(トウ)紙(カミ)紗(シヤ)のごとく。朱(シユ)のキメにて描(カク)ようを。正平墨(シヤウヘイズミ)にて描(カク)等(トウ)紙(カミ)紗(シヤ)のごとく。能(ヨク)工夫(クフウ)ようにし。

菊ザラサ

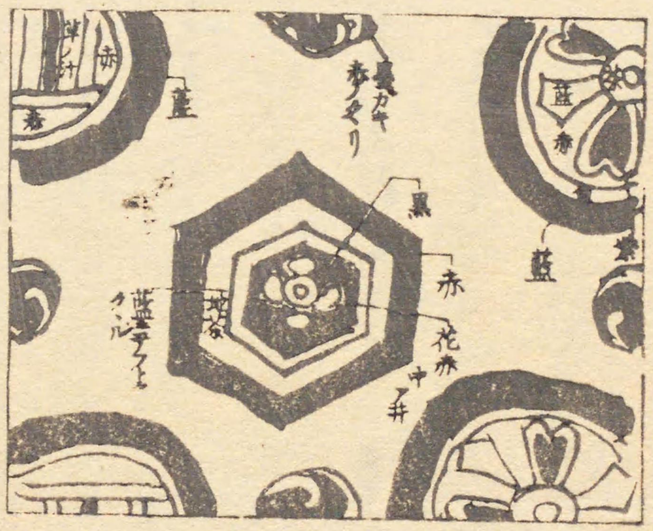
地黒ノ方ナレ、菊ハ白ト黄ト
浅黄ノ一ツニゼナリ



綱モツカウ



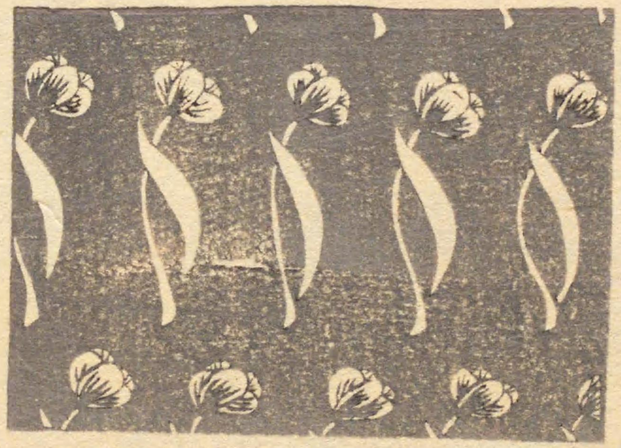
大銭（オホゼニ）ギツカフ 地白



雞頭（ケイトウ）手 地白

花スベテ生エンジヨリ生エンジニテ描
オコス。莖一葉ハ藍ガチノ草ノ汁。生エンジ
ニテカキオコス

白罌粟ザラサ



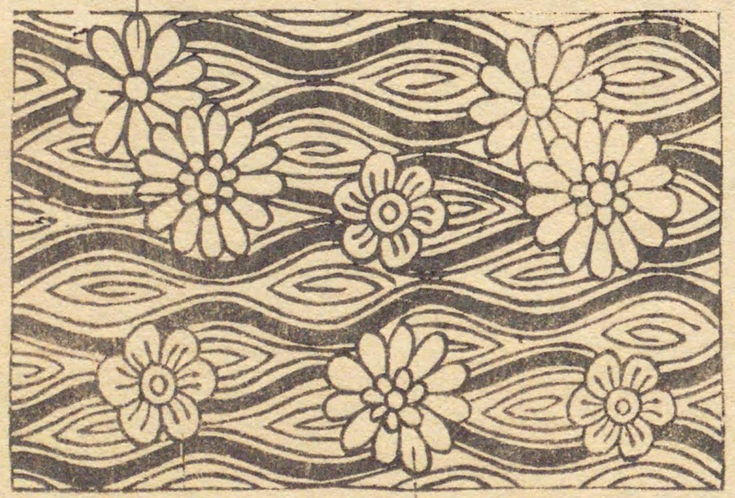
地生エンジ、花白、シベ濃生エンジ、葉ア井、ギノ白

アミ手

スミガキ、花赤ノカキワリ、茶ニ赤花ハ一リンツヽ紫トモ、イロ〳〵ナリ

赤生エンジ
葉モミモ藍ナリ

立ワク手

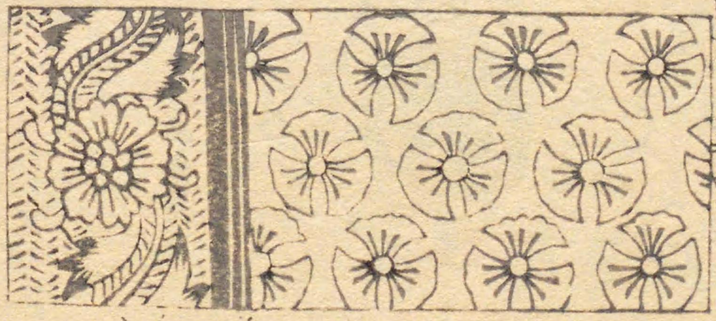


地ア井、立ワクノ大キハ墨、細キハインチン、花一ツハモヽイロ、ニツハ紫、ホキハ白、イヅレモ濃生エンジカキワリ

ヤヘノ内ハ白

紫

銀杏葉手



地アサギ、又赤モアリ▲イラ葉一ツハ生エンジ、ニツハ草ノ汁一ツハ黄、ホハ白ニテ濃生エンジノカキワリ

草ノ汁

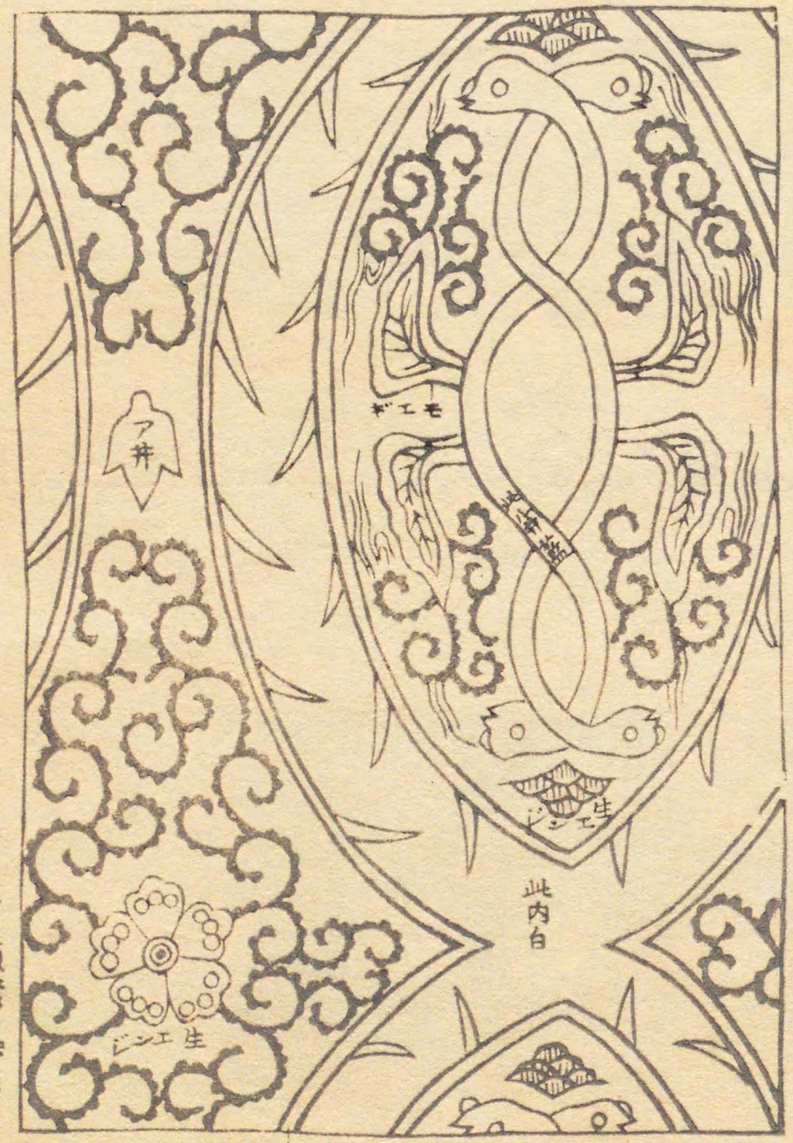
ゴマ藍
花モヽイロ濃生エンジカキワリ

獅子手（シシノテ）

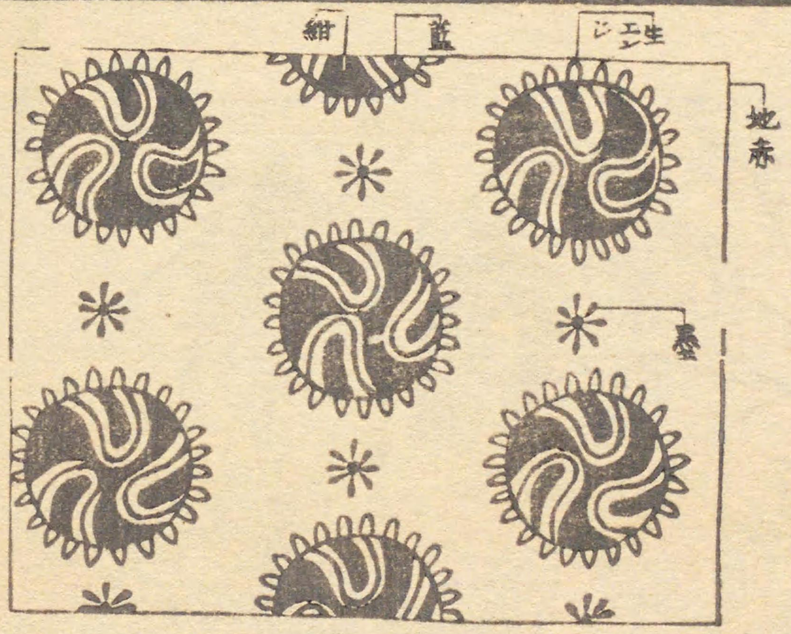
地生エンジ花ノ縁ウスキ生エンジナリ・チク八白
獅子ハ藍・背ノ文ハ白ノ条ヌキ・細カキハ黒ヒ

蔓唐花（ツルカラハナ）

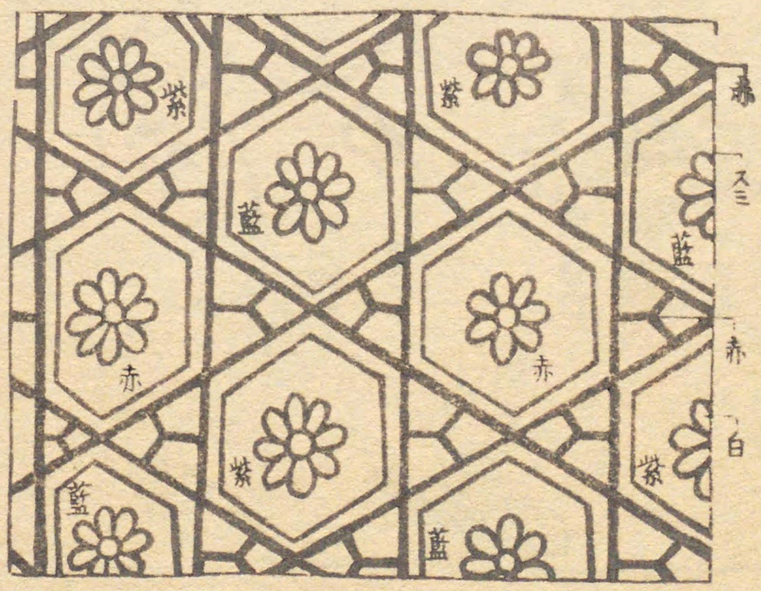
雨頭手（リョウトウ）



巴（トモエ）手

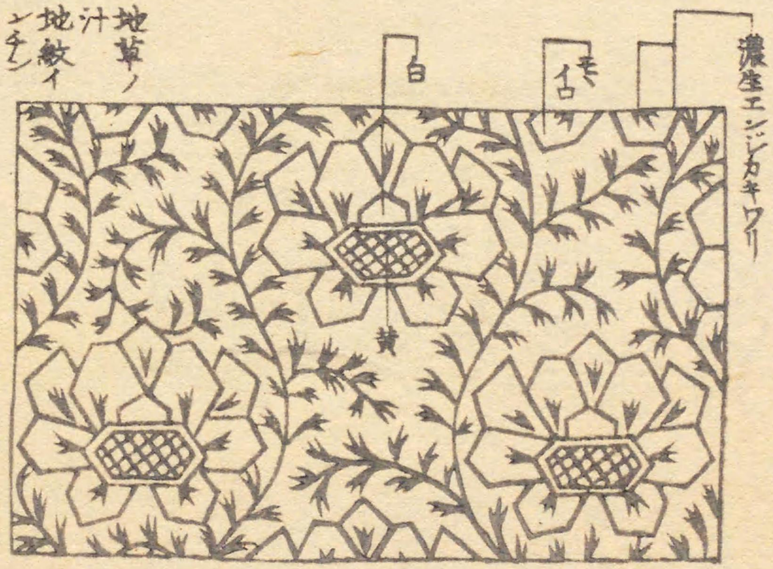


カゴメザラサ

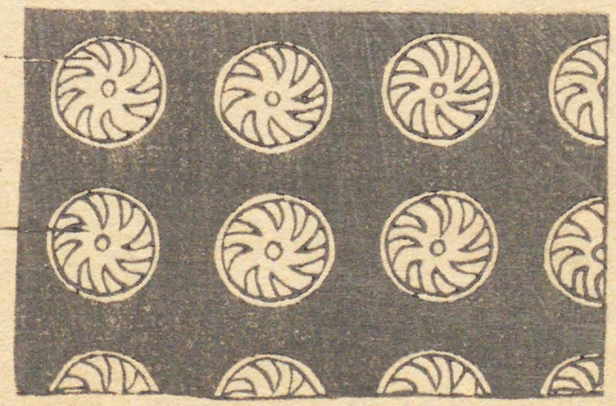


人形手（ニンギョウ）

牡丹手（ボタン）



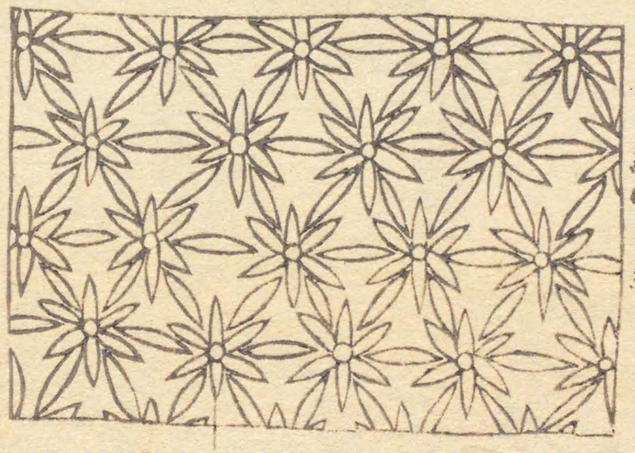
風車手（カザグルマ）



地ツヤノ十七裏

諫鼓手（カンユデ）

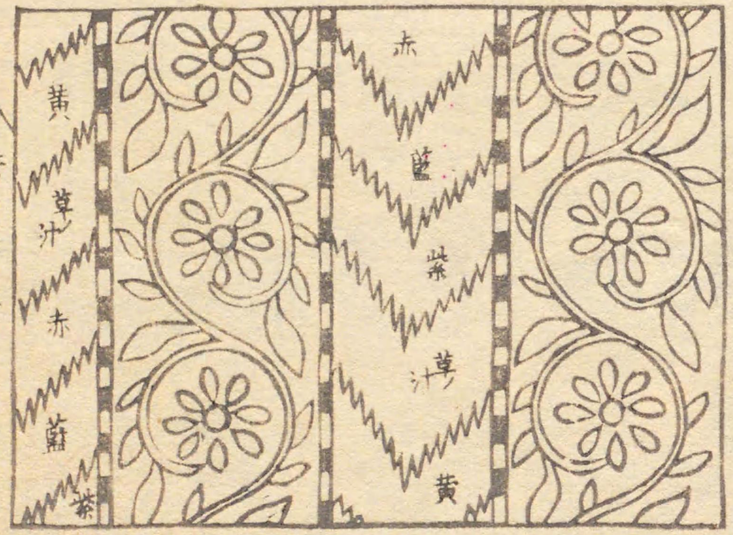
篠葉手（ササノハ）



山鵲手（サンジャクデ）

段ザラサ

惣カキワリスミ▲花ニツハ赤、一ツハ紫
▲ツル葉ハ草ノ汁▲ダンスチノ星赤



此ヲコク中ホドヨリ木ヲホソク

龜ザラサ

地ツヤアル黒ナリ

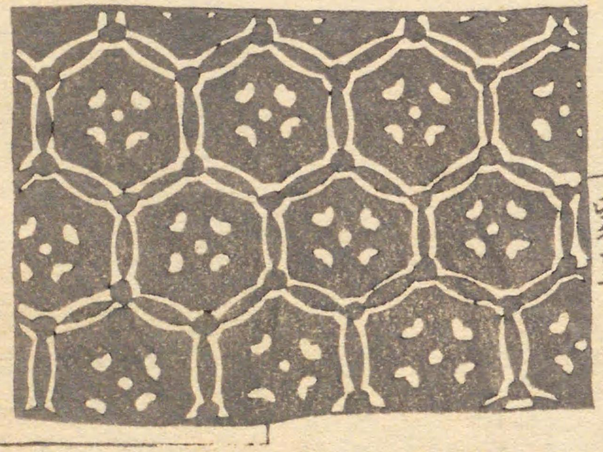
右龜ノ甲ノ上ヲモ紫ノ所ナラバヤハリ紫ニテ薄クカクナリ

山水手（サンスイデ）

赤ノ霜フリモアリ
スミガキ花トリハ赤ノカキワケ

カウチギッカブト 六ツ目龜甲

地生エンジ



不殘藍

此アヒモジ

ニホヒ 香手

藍 赤 茶

地アイニテ撰揉墨ガキ

此スヂ赤

赤

テンメウ手

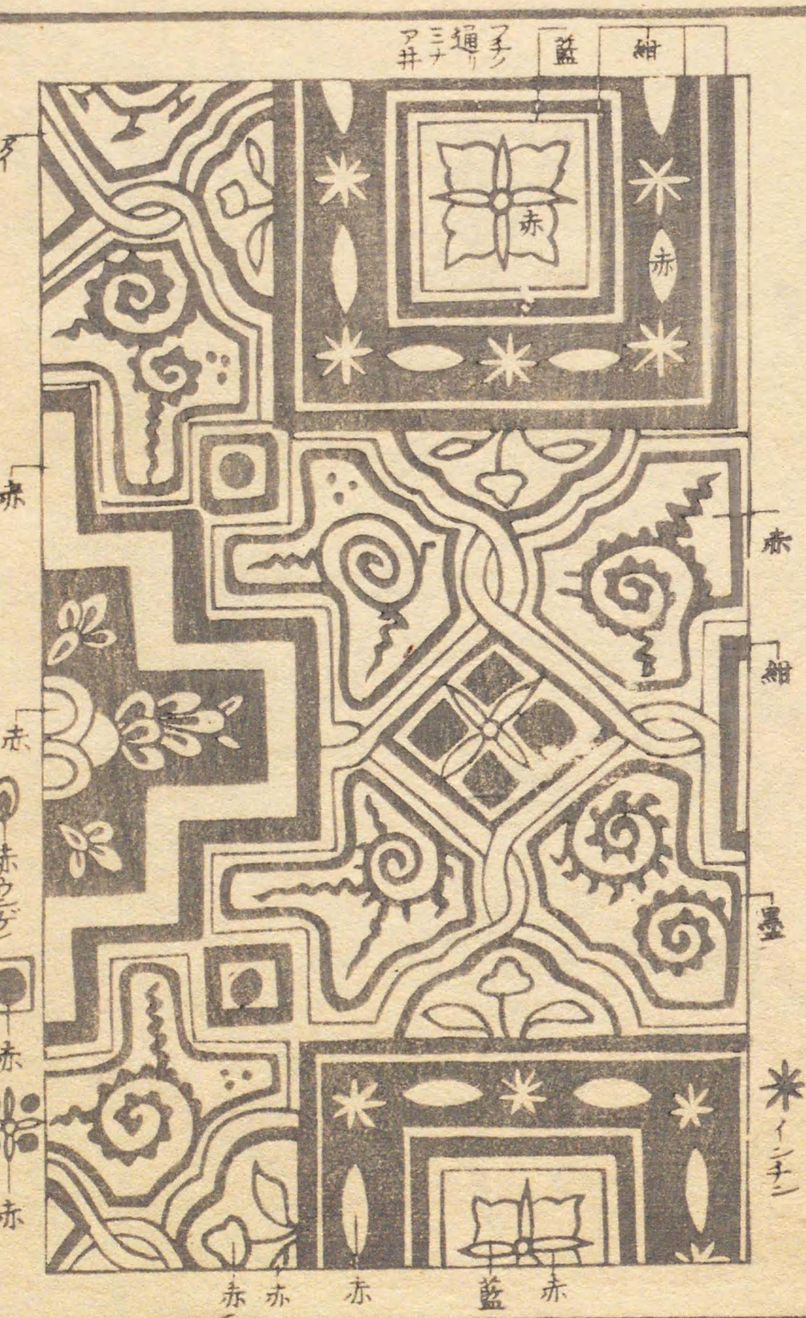
地モエギ

此類墨

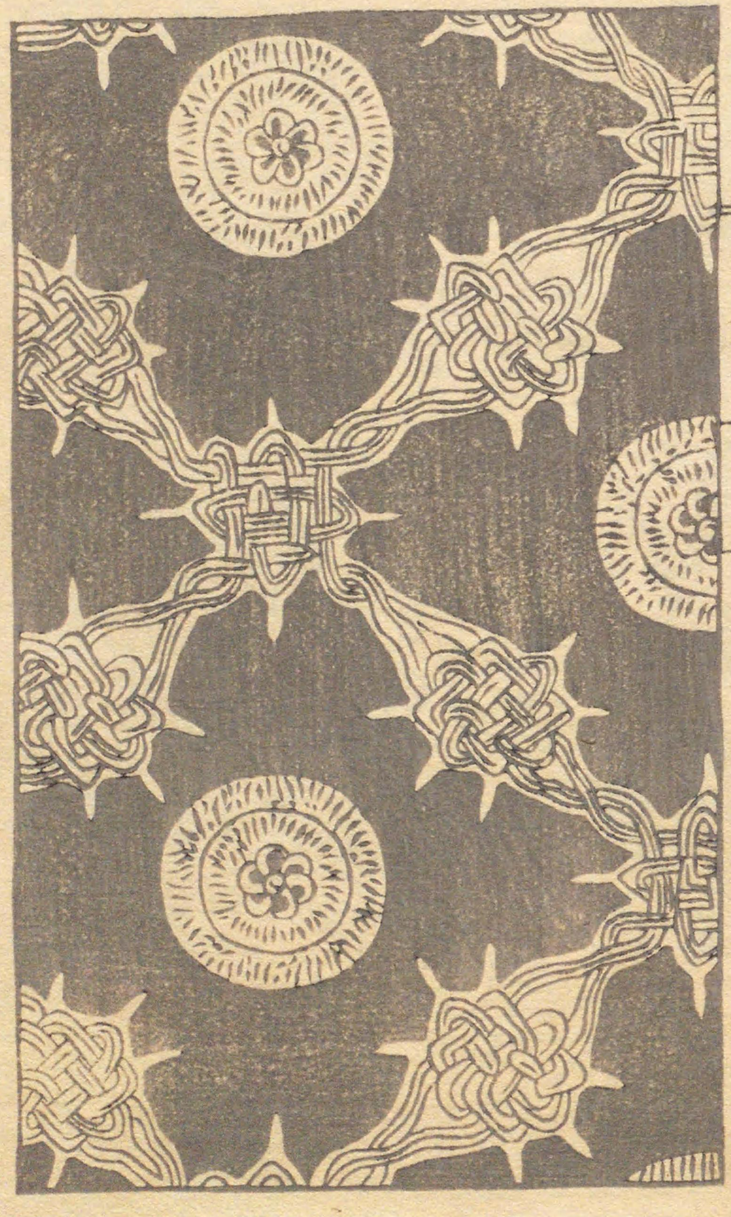
此内アヲキ生エンジ墨

生エンジ生エンジ墨

蜀紅手（シヨクコウ）


藍
紺
赤
赤
赤

ウンヤ手 地黒



比翼（ヒヨク）手

スミガキ。花赤ノカキワリ――イモン左右共同ジ彩色

八ノ字手

スミガキ 花ハ赤ノカキワリ薄生エビナスナリ
葉草ノ汁

赤
白
赤
モエイロ
萌黄
赤
萌黄
赤
萌黄
赤